

イチゴ炭疽病、イチゴ萎黄病の予防を徹底しましょう！

イチゴ炭疽病とイチゴ萎黄病は、高温期であるいちごの育苗期間中に発生し、育苗期の後半になるにしたがって発生が多くなる難防除病害です。

6・7月の調査の結果、一部のは場では、すでに両病害の発生が確認されています。

また、気象庁発表の1か月予報(7/6~8/5)では、気温は高いと予想されているため、両病害の発生に好適な条件が継続され、今後、発生が増加するおそれがあります。

発病後の防除は困難であるため、**①予防を主体とした薬剤散布を行うこと、②定植前に本ぼの土壤消毒を行うこと、③潜在感染苗を本ぼへ持ち込まないこと**を意識し、予防に重点を置いた対策を行いましょう。

1 炭疽病

●被害症状

- ・初期症状として、葉に薄墨色の直径 2~3 mm 程度の丸い斑点が発生する(写真1)。
- ・葉柄やランナーでは、黒色で少し陥没した紡錘形の病斑を生じ、進展すると折損する。また、高温・多湿時には病斑上に鮭肉色の分生子塊を形成する(写真2)。
- ・クラウンに感染した場合には、株が萎凋して枯死する(写真3)。クラウン外部から内部に向かって褐変腐敗が進む(写真4)。

●主な伝染方法

- ・水滴伝染…降雨や頭上かん水による水はねで感染株から分生子が飛散することで感染が広がる。



写真1 葉上の斑点型病斑



写真2 葉柄の陥没病斑



写真3 苗の萎凋症状



写真4 クラウン内部の褐変

●防除対策

- (1) 分生子の飛散を防ぐため、頭上かん水は控え、できるだけ水の跳ね返りのない方法でのかん水を行う。株元かん水や底面吸水によるノンシャワー育苗が有効である。
- (2) 茎葉の濡れ時間が長いと感染・発病が助長される。かん水は午前中に行い、夕方には地上部が乾いた状態になるよう、かん水の時間や量を調節する。
- (3) 発病株や感染が疑われる株は見つけしだい取り除き、ほ場外で嫌氣的発酵処理（罹病残渣を肥料袋等に詰め、残渣重の半分の水を添加し、袋内の空気を抜いて密閉し、日当たりのよい野外に放置する）により、病原菌の不活化を図る。
- (4) 発病株の周辺の苗は病徴が見られなくても本病に感染している（潜在感染）可能性が高いため、抜き取り処分する。
- (5) 症状が出てからの防除は困難なので、表1を参考に発生前からRACコードの異なる薬剤のローテーション散布を行う（[イチゴ炭疽病薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ（HP）に掲載中）。
- (6) 定植前に本ぼの土壤消毒を行う。

※[病害虫防除対策のポイント No. 21 イチゴ炭疽病](#)を当センターHPに掲載中。

表1 イチゴ炭疽病に登録のある主な薬剤 (令和6年(2024)年6月30日現在)

薬剤名	希釈倍率	使用時期	本剤の使用回数	有効成分の種類	有効成分の総使用回数	FRACコード
セイビアーフロアブル20	1000倍	収穫前日まで	3回以内	フルジオキシニル	3回以内	12
キノドーフロアブル	500～800倍	育苗期	3回以内	有機銅	3回以内	M1
タフパール	2000～4000倍	育苗期～収穫前日まで	—	タロマイセスフラバス	—	BM2
サンリット水和剤	2000倍	収穫前日まで	3回以内	シメコザール	3回以内	3
ファンベル顆粒水和剤	1000倍	収穫前日まで	3回以内	イミノクタジナルベシル酸塩 ピリベンカルブ	10回以内 ¹⁾ 3回以内	M7 11
ベルコートフロアブル	1000倍	育苗期(定植前)	5回以内	イミノクタジナルベシル酸塩	10回以内 ¹⁾	M7

1)育苗期は5回以内、本ぼでは5回以内

※ RACコードが同一のものは作用点が同じなので連用を避ける。

2 萎黄病

●被害症状

- ・新葉の小葉3枚のうち、1枚または2枚が黄化して小さくなり奇形葉となる（写真5）。
- ・発病株は健全株に比べて、株全体が著しくわい化する（写真6）。
- ・クラウン内部の導管が褐変する（写真7）。

●主な伝染方法

- ・土壌伝染 …土中に残った厚壁胞子が感染源となり、病原菌が根から侵入して感染する。
- ・ランナー伝染…潜在感染している親株からランナー内の導管を経由して子苗に伝染する。

●防除対策

- (1) 発病してからの防除は困難なので、表2を参考に予防を主体にトップジンM水和剤やベンレート水和剤により防除を行う。
- (2) 育苗期に乾燥させると、傷んだ根から感染することが多いため、栽培管理に注意する。
- (3) 発病株や感染が疑われる株は見つけしだい取り除き、ほ場外で嫌氣的発酵処理（罹病残渣を肥料袋等に詰め、残渣重の半分の水を添加し、袋内の空気を抜いて密閉し、日当たりのよい野外に放置する）により、病原菌の不活化を図る。
- (4) 土等に含まれる病原菌は資材消毒剤で消毒しても生存する可能性があるため、育苗資材に土等がついている場合には、よく洗い、土等を除去してから消毒するか、育苗資材を更新する。
- (5) 表2を参考に定植前に本ぼの土壤消毒を行う。

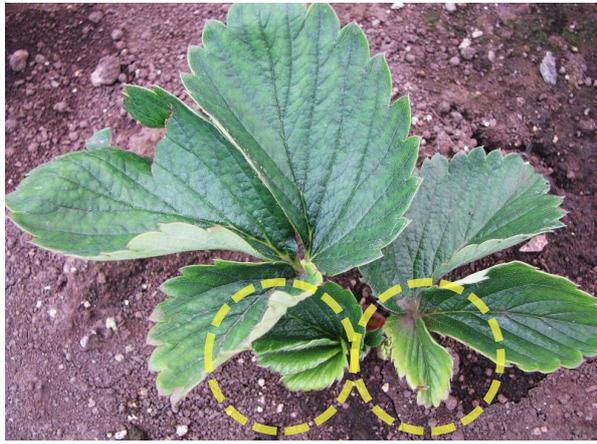


写真5 奇形葉症状



写真6 わい化症状



健全株



発病株

写真7 導管の褐変症状

萎黄病はクラウン部の**導管が褐変**する。
 ※炭疽病はクラウン外部から内部に向かって褐変が進む(写真4)ため、症状が異なる。

表2 イチゴ萎黄病に登録のある主な薬剤

(令和6年(2024)年6月30日現在)

薬剤名	希釈倍率	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	有効成分の種類	有効成分の総使用回数	RACコード
トップジンM水和剤	300~500倍	仮植時及び仮植栽培期	3回以内	灌注	チオファネートメチル	4回以内 ¹⁾	F:1
ベンレート水和剤	500倍	育苗期	3回以内	灌注	ベンジル	9回以内 ²⁾	F:1
【土壌消毒剤】							
クロルピクリン錠剤	1㎡当り10錠		2回以内(床土1回以内、ほ場1回以内)	土壌くん蒸(ほ場)「1㎡当り10錠処理」地表面に所定量を散布処理する。	クロルピクリン	3回以内 ³⁾	I:8B
クロピクフロー	20~30L/10a		1回	耕起整地後、灌水チューブを設置し、その上からポリエチレン等で被覆する。その後、液肥混合器等を使用し、本剤を処理用の水に混入させ処理する。	クロルピクリン	3回以内 ³⁾	I:8B

1) 種子への処理は1回以内、は種後は3回以内

2) 種子粉衣は1回以内、苗根部浸漬は1回以内、育苗期の灌注は3回以内、本ぼ定植後の灌注は1回以内、散布は3回以内

3) 床土1回以内、ほ場2回以内

※ RACコードが同一のものは作用点が同じなので連用を避ける。

詳細は、農業総合研究センター防除課 (Tel 028-665-1244) までお問合せ下さい。
 病虫害情報発表のお知らせは「農政部X (旧ツイッター) (@tochigi_nousei)」、栃木県農業総合研究センターホームページ (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/>) でもご覧になれます。



6月~8月は「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。
 いつものチェック! 農薬を使用する際は、ラベルをよく読み正しく使いましょう!

